

まほうのかけ声

つち
はし
たい
よう
土橋 太陽

「太陽、がんばらんか！あと少しだぞ！」

ゴールを前に、じいじの声だけがほくの耳に聞こえた。ゴールの近くにはたくさんの方がいたのに、ふしぎとほくの耳にはじいじの声しかとどかなかった。

毎年持久走大会には、お母さんと桜島に住んでいるじいじとばあばがおうえんにきてくれる。ほくは走ることが大好きだ。だから一年生から持久走大会は、いつも一番でゴールしている。

二年生の持久走大会もいつものようにみんながおうえんに来てくれた。初めはつかれないようにゆっくり走っていると、すぐに十番くらいになっていた。ほくは自分でペースを考えて走っていると、少しずつみんなのペースが落ちてきた。

「よし、そろそろだ。」

ほくは、ラストスパートをかけた。ゴールが近づいてくると、ゴール近くにじいじたちが待っていた。じいじの顔は少しおこったように見えたけど、ほくだけを見て一生けんめいおうえんしてくれているすがたが見えた。少しずつ苦しくなってきたけど、最後にじいじの声を聞くと足がすつと軽くなり、ゴールテープを一気に、かけぬけることができた。まるでじいじの声がまほうのようにほくの足を軽くしてくれたようだった。ゴールをするとじいじの顔は、いつも

のやさしい顔で

「太陽、がんばったね。」

と、やさしい声をかけてくれた。そんなじいじも実は、病氣と戦っていた。ほくのおうえんに来てくれた時にも、病氣できついのに、ほくのためにわざわざ桜島から来てくれた。ほくはそんなじいじに

「じいじも病氣に負けずにがんばって。」と声をかけていた。

そんなじいじも去年の夏休み、ほくたち家族みんなの見守る中で亡くなってしまった。

その年の持久走大会は、じいじのいない初めての大会だった。じいじのおうえんが不在から一位になれるか不安だったけど、ゴール近くになると頭の中にじいじの声が聞こえてきた。

「太陽あと少しだ。がんばれ。」

ほくは、じいじのおうえんにこたえるために最後まであきらめずに必死に走った。じいじのまほうの声かけでその年も一番にゴールテープを切ることができた。ほくは一位のカードを青い空に向けてつぶやいた。

「じいじのまほうの声かけで今年も一位が取れたよ。じいじありがとう。これからもよろしくね。」